

研究における「我」と「汝」

総合政策学部 教授

田島英一 たじまえいち

学生に、こんな冗談を言うことがある。「経済成長なんて、簡単だよ。自宅の家事を、法律で禁止すればいい。それらは近所にやってもいい、給与を払う。自分もどこかの家事で報酬をもらうから、表面上は相殺だ。だが、給与は税務署に捕捉され、課税対象となる。租税収入が増えるし、育児や家事の労働価値が可視化されて、GDPも大幅増だ」

「幸福」と聞いて、多くの人が家庭を連想する。育児や家事といった、親密圏で交わされる無償の行為こそが、幸福の基礎だからであろう。時に想像力は、この親密圏を、家族よりも大きな単位にまで拡大する。だから、ボランティアになる人、見ず知らずの他者に献金をする人がいる。おそらくは、こうした可視化されない価値の満ちる社会こそが、より人を幸せにするのであろう（最近わが国の政権は、逆に私の皮肉に近づいてきた感があり、苦笑を禁じ得ないのであるが）。幸福は個別の文脈にこそ宿る。GDPといった没個性な数字には宿らない。

精神分析学者ユングに、こんなエピソードがある。彼は少年時代、とにかく算数が苦手だった。先生がたずねる。「鳥が2羽います。後から3羽飛んで来たら、全部で何羽？」するとユング少年は、こう答えたのだそうだ。「それらはすべて、違う鳥です。足すことなんて、できません」。数とは、個性を無視した時に成立する概念である。年間3万人を超える日本の自殺者には、自殺者の数だけ異なる悲しみがある。だがメディアは、それを冷たい統計としてしか伝えない。言語もまたしかり。「犬」ということばは、個別の犬に備わる個性をすべて捨象することで情報を伝達する、逆説的な記号である。

数字や言語を使って論文を書くのは、怖いことなのだと思う。ナチスの戦犯アイヒマンにとって、処刑対象のユダヤ人は数字でしかなかった。研究室がアイヒマンの執務室に墮する危険性は、常にある。顔つきあわせる調査は、必須だ。それが我々にとって、『我と汝』(M・ブーバー)を回復する、数少ない機会なのだから。そう自戒しつつ、中国研究を続けている。

教員によるエッセイコーナー

談話室

室



中国河北省にて、ボランティア学生たちにインタビュー調査を行った際のもの（筆者は中央）